

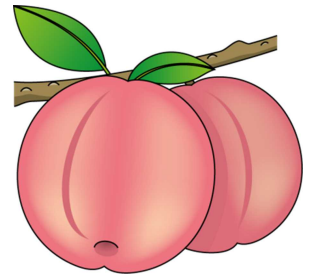


神金公民館だより

第148号
2022年
7月1日



モモ・スモモ 出荷期到来



梅雨入りとともに、モモやスモモの生育がどんどん進み、神金にも出荷期がやってきたようです。この公民館だよりが、配布される頃にはモモの出荷も始まっていることと思います。

開花の頃は、昨年より1週間ほど遅かったようですが、4月の平均気温が昨年より高かったことで生育が早まり、収穫期はほぼ昨年並みとなりました。

出荷期が早まってきたことで、農家の方々は、スモモの摘果やモモの袋かけなどの作業に作業に追われたのではないのでしょうか。また、出荷期が早まったことで「粒が大きくなるか…」という声をよく聞きます。手間隙かけて、作業を行ってきた農家の方々のご苦勞が報われるよう、少しでも大きくてよい果実に生育してくれればと思います。



公民館施設の整備

公民館玄関扉の取り付け部が床面から浮き上がってしまい、不安定な状態でした。また、外用のロッカーも経年劣化してきていました。

二件とも、市の予算の中で修繕したり購入したりしていただきました。ありがとうございました。



神金振興会・第1回代表者会

5月20日に「神金振興会第2回代表者会」が行われ、地区内各組織の代表者の方々が40人ほど参加しました。

令和3年度の事業・決算報告や令和4年度の事業・予算計画について話し合いました。

令和2年度に設置した防犯カメラが活用されていることから、昨年度も設置予定でしたが、コロナ禍の影響で納入が遅れていることなどが報告されました。



◇空き家状況調査◇

昨年12月に、区長会が行った「神金地区空き家状況調査」の集計結果が前区長会長さんから報告されました。

地区内にある放任空き家について、行政に報告相談しましたが、今のところ対策は考えていないとのことでした。防犯・防災上、住民の方々が日頃から目を向けていくことが必要との意見が出されました。

地区	区名	空き家	親族等で管理	放任家屋	別荘
一区	下切	14	11	3	0
二区	上切下	18	16	2	0
三区	上小田原	15	13	2	6 管理されている
四区	下小田原	9	7	2	1 管理されている
五区	上切上	30	23	7	4 管理されている
六区	裂石	9	7	2	0
七区	一ノ瀬高橋	53	35	18	35 別荘の4分の3が空き家
合計		148	112	36	46

神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

令和になった今、神金で生きる者にとって、この地で生活した人々の足跡を鮮やかに蘇らせ、知恵や遺産・心意気を学び、心の大きな後ろ盾や糧になればと願います。

金 二

日蓮上人の年譜によると、文永六年（1269）「日蓮勝沼北原黒川田波に遊化す」とある。更に「此の地金が出、家一千あり、精舎（寺）を建つ」とある。勝沼北原（休息）から大菩薩嶺を越え黒川に至り鉾山に従事する人々のためにお寺を建てられたものと想う。寺屋敷とか寺窪とか妙善寺平なる地名が現在残っている。次第に金山が寂れる様になったので金光山妙善寺は下於曾の山交バスの駐車場のそばに移り、永久山法蓮寺は上赤尾に建てられ両寺とも現存している。鉾山で働いていた人々も神金、大藤、赤尾、下於曾、熊野方面に住みついた様である。小学校上の広瀬四郎さんのお家に伝わる古文書によると、寛永十七年（1640）十二月二十三日付けの江戸徳川幕府に対しての陳情書がある。これは既に金が掘り尽くされたり、坑道に水が流れ込み採掘困難になったりしたので、新たに埼玉県秩父の奥、延沢金山か又の沢金山を掘らせて貰いたい旨のものである。内容は天正十年（1582）北条氏政が山梨県に攻め入った時、又は天正十三年小牧の戦の時、又は神奈川県小田原城を攻めた戦に、又は慶長十九年（1614）の大坂夏の陣、冬の陣の戦、寛永十四年（1639）九州長崎県島原の乱などの度々の戦に権現様（徳川家康）の申付けによって出陣し武功を立てた功績があったので、私共の申分を聞いて欲しいと言うのである。尚それから八年後、慶安元年（1648）六月吉日の古文書によれば「近年金の採掘が少なく生活に困っているのので、先年より重ねてお願いした二つの金山の内どちらかを掘らせて貰えば、五ヶ年で小判千両と定め一ヶ年につき小判二百両を前金にて差上げますのでご慈悲と思って私共の願いを聞き届けて貰いたい」との切々たる嘆願書である。この頃が閉山の時ではないかと想像される。ハケ年の長きにわたり嘆願し続けた陳情も幕府の都合によりお聞き届けにならなかったようである。昔は黒川千軒と称され、現在も多数の住居跡が残され昔の盛んなりし時の様が偲ばれるのである。（次ページに続く）

神金の歴史

慰安婦も数十名いたと言われ「女郎ごおり」と称される処がいずれも山の中腹にニヶ所ある。落合より三軒下流に有名な「おいらん淵」と言う名所があるが、戦に勝って敵地から略奪した若い女性が辛い勤めに耐えかねて思い余って川に身を投げ自らの命を絶った女性哀話であろうかと思う。元坑道付近に精錬作業場と思われる広場もあり所々に石臼のかけらがちらばっている。坑道は昔のものは全然見られないが現在あるものは大正から昭和初年のものと思われる。川から二十米程の所にあり筆者も昭和四十二年頃八十米位の奥まで入ったがそれから先は水で進めなかった。里から黒川への物資の運搬に便利であるため、山の中腹部を横断した道路があり横手山の名で今に伝えられている。主たる物資は勝沼を經由し鎌倉街道又は甲州街道に通じたものである。勝沼から牛奥、下萩原を経て中萩原の山裾の道を「黒川道」とも「黒川往還」とも言い小山、向久保の上から上原を通り神部神社の前から藤原木を経て神戸を更に仲新居に出て重川を渡り萩原口留番所（現在の番屋）を通り甲州裏街道を裂石まで行き左折して山道を黒川に通じた道路を「金山道」と称した。和泉屋、柳屋共に当時旅籠（ハタゴ）と称し旅館であったものと想う。



徳川家康の命令によりいく度かの戦に出陣して功を立て度々恩賞にあずかっているが、次の様な作業を主としたものである。城に対して坑道を掘り味方の突撃路をつくる、城の石垣を崩すこと、深井戸を掘り城内の井戸を枯らす。濠の水を枯らすため水路を別に変える等々土木工事が主であった。然も昼夜を分かたず粉骨碎身の働きをさせられたものと想う。一之瀬鶏冠神社の裏に妻恋稲荷と言うお宮があるが、大坂夏の陣、冬の陣に出陣の折、早く無事で帰れることを神に祈った祭りが五月と十一月行われていた。昭和十四年頃までは続いたがその後は途絶えたそうである。鉦、笛、太鼓、鼓等の楽器を先頭に袴を着け大小の刀を差し陣笠をかぶって武家姿になり行列をつくり近くのお宮に参詣する行事である。

黒川谷に於ける採掘は慶安年間に掘り尽くされた様であるが、後に柳沢吉保国主となり牛王院平、黄金沢等からも掘ったが量と質は低下した様である。広瀬家文書の中に金山「諸荷物請取渡帳」があるが、明治三年正月、問屋四朗衛門と記されている。内容は米、味噌、醤油、酒、油など中には五エ門釜などもあり当時も金の採掘がなされたことが実証される。